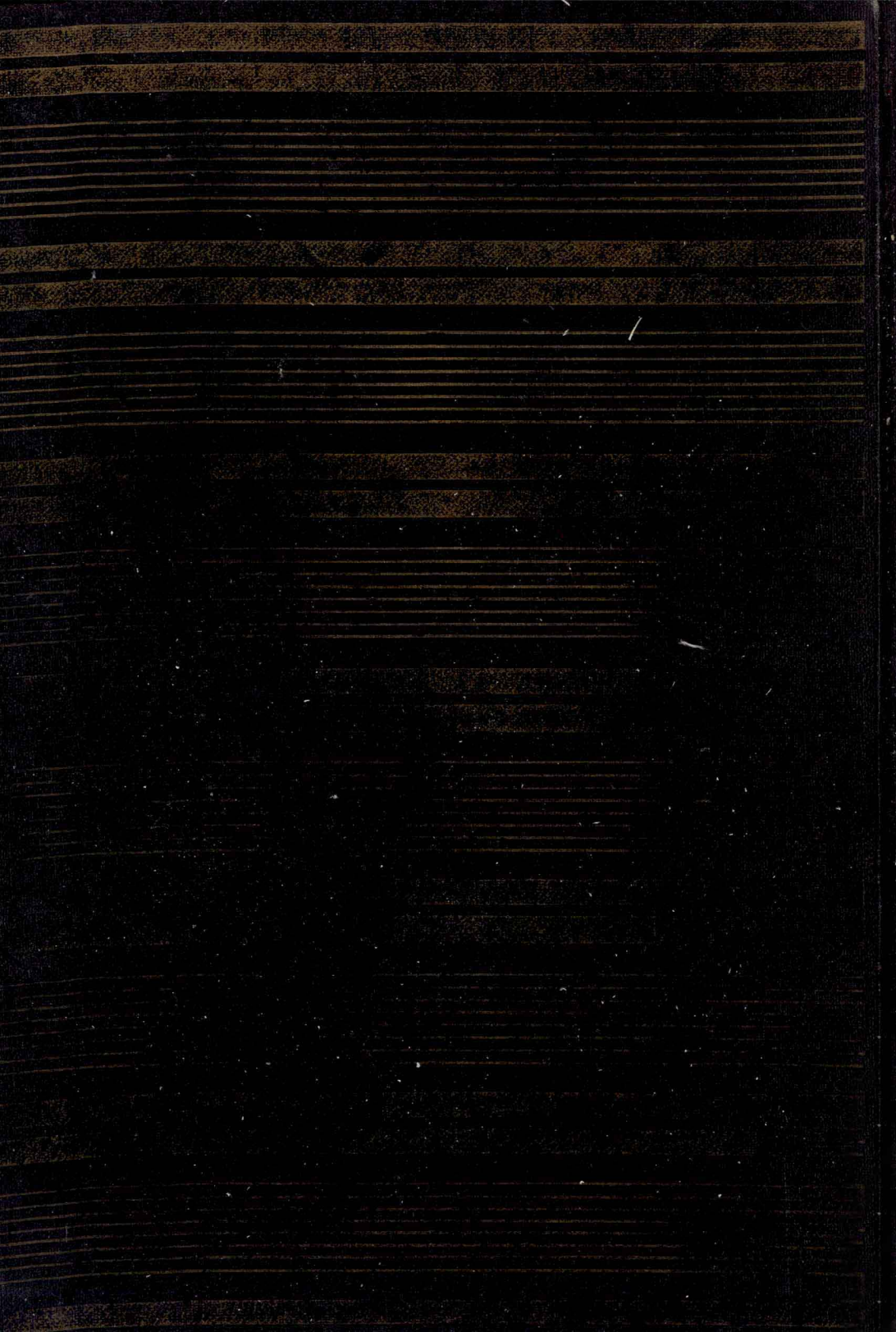




世界文学全集

ミッチェル

# 風と共に去りぬ

1

大久保康雄・竹内道之助訳

河出書房

© 1969

GONE WITH THE WIND

Copyright 1936 by The Macmillan Company

Copyright renewed 1964 by Stephens Mitchell and Trust Company of Georgia  
as Executors of Margaret Mitchell Marsh

Copyright renewed 1964 by Stephens Mitchell

All rights reserved

Protection under the Berne, Universal and Buenos Aires Conventions

Published under Licence from Mikasa Shobo, Tokyo,  
Holder of the rights to print and publish in Japan.

カラー版 世界文学全集 第32巻

ミッチェル 風と共に去りぬ 1

昭和 41 年 3 月 20 日初版発行

昭和 44 年 7 月 1 日5版発行

訳者 大久保康雄  
竹内道之助

装幀者 亀倉雄策

発行者 中島隆之

印刷者 澤村嘉一

印刷 凸版印刷株式会社

発行所 株式会社 河出書房新社

定価 750 円

製本・加藤製本株式会社

製函・加藤製函印刷株式会社

本文用紙・三菱製紙株式会社

表紙・日本クロス工業株式会社

東京都千代田区神田小川町3の6

電話 東京 (292) 3711 (大代表)・振替口座 東京 10802

# 目 次

風と共に去りぬ

1

|        |             |             |             |
|--------|-------------|-------------|-------------|
| 解<br>説 | 第<br>3<br>部 | 第<br>2<br>部 | 第<br>1<br>部 |
| .....  | .....       | .....       | .....       |
| 405    | 226         | 112         | 6           |

巻頭口絵 ミッチェル女史（1941年撮影）

本文カラーさし絵

グロー・サラ

© 1938 Librairie Gallimard

装 幀 亀倉雄策

風と共に去りぬ

1

大久保康雄  
竹内道之助 訳

## 主要人物

スカーレット・オハラ この小説の女主人公。南部の心臓部といわれるジョージア州アトランタに近いタラの大農場主オハラ家の長女。個性的な美貌と火のように激しい気性の持ち主。アシュレに失恋した腹いせにチャールズ・ハミルトンと結婚する。

ジェラルド 広大な綿花畑と多くの黒人奴隷をもつアイルランド生まれの豪農。反骨と剛毅の性格の反面にやさしい心情の持ち主。

エレン ジェラルドの妻。フランス人を祖父母にもつ優雅な貴婦人。

スカーレットの母。

スエレン スカーレットの妹。

キャリーーン スカーレットの二番目の妹。

チャールズ・ハミルトン ハミルトン家の長男。スカーレットの第一の夫となる。

メラニー アシュレの妻。献身的で寛容なところの持ち主。チャールズの妹。

アシュレ・ウィルクス トウェルヴ・オークスとよばれる大農場をもつジョン・ウィルクス家の長男。貴族的南部の教養と文化を身につ

けた青年。スカーレットの情熱にひかれながら、南部の伝統的社会にふさわしい従妹のメラニーと結婚する。

ハネー アシュレの妹。婚約同様のチャールズをスカーレットにうばわれる。

インディア アシュレの二番目の妹。

フランク・ケネディ スエレンの許婚者。

レット・バトラー 南軍の敗北を見ぬき、戦争をばかけた浪費だといって密輸入で巨利をしめる大胆不敵な風雲児。風のごとくスカーレットの前にあらわれて、彼独特のやり方で求愛をつづける。

ベル・ワットリング アトランタの夜の女。レットのなじみ。

ミード博士 アトランタの医師。熱烈な南部同盟支持者。

ビティバット チャールズやメラニーの叔母。老嬢。

マミー エレンが実家からつれてきた黒人の侍女。

リー將軍 ヴァージニア州出身の南軍の司令官。人格、戦略ともにすぐれた名將。

シャーマン將軍 アトランタ攻撃の北軍総指揮官。

ジ  
ョ  
ン・  
R・  
マ  
ー  
シ  
ユ  
へ

## 1

スカレット・オハラは美人ではなかったが、双子のタールトン兄弟がそうだったように、ひとたび彼女の魅力にとらえられてしまうと、そんなことに気のつくものは、ほとんどないくらいだった。その顔には、フランス系の「ゴースト（海岸）」貴族の出である母親のデリケートな目鼻だちと、アイルランド人である父親のあから顔の粗野な線とが、めだちすぎるほど入りまじっていた。しかし、さきのとがった、角ばったあごなど、妙に人をひきつける顔である。目は、茶のすこしもまじらない淡碧で、こわくて黒いまつ毛が、星のようにそのまわりをふちどり、それが目じりへきて心もちそりかえっている。その上に、黒くて濃い眉が、ややつりあがりぎみに、もくれんのような白い肌に、あざやかな斜線をひいていた。——この肌は、南部の女たちがひどく大切に、ボンネットやヴェールや手ぶくろなどで、あのジョージアの激しい日ざしから、じつに注意ぶかく守っているものなのである。

一八六一年四月の、ある輝かしい午後、父の大農園タラのポーチの涼しいかげに、タールトン家の双子兄弟スチュアートとブレントとともに腰をおろしている彼女のすがたは、一幅の絵のように美しかった。スカートのフープ（フープ）の上に十二ヤードも波うっている緑の

地に花模様の新しいモスリンのドレスは、最近父がアトランタから買ってきたくれた緑色のモロッコ皮の上靴に、よく調和していた。ドレスは、このかわいいわい三郡きつての細い腰、十七インチの腰の美しさを、くつきりと浮きたたせ、びっちりとしについたバスク（土着）は、十六歳にしてはよく成熟した胸のふくらみを見せていた。しかし、内気そうにひろげたスカートも、シニヨン（まげ）に結ってネットをかけたしとやかな髪も、ひざの上につつましくかさねている小さな白い手も、彼女のほんとうの人格はどうていかくしきれるものではなかった。気をつけてやさしく見せている顔のなかで、碧色の目だけは、あらあらしく強靱な意志と、あふれるような情熱とをあらわして、その上品な物腰とは、およそ似つかわしくないものがあつた。彼女の挙措は、母のやさしいしつけと、黒人の乳母の、よりきびしい訓育とによつてしられたものであつた。だが、目だけは彼女自身のものであつた。

彼女の両側には、ひざまでの長靴をはいた双子の兄弟が、のんびりといすにもたれて、鞍ぶどりのした長い両足をむぞうさに組みかさね、笑ったり話したりしながら、はつか水の高いコップごしにきらめく日の光に、目を細めていた。ふたりとも年齢は十九歳、丈は六フィート二インチ、骨組み高く、筋肉たくましく、日にやけた顔、濃い赤褐色の髪、明るい傲慢な目、同じ青い上着、同じからし色の乗馬ズボンにからだをつんで、この兄弟は、まるで二つの綿のさやのようによく似ていた。

戸外では、おそい午後の陽光が、なまめに前庭に射し、新緑を背景にして、まっ白な花のかたまりのようななみずきの茂みを、まばゆく浮きださせていた。兄弟の乗馬は、馬車道のほうにつないであつたが、大きな馬で、主人の髪の毛とおなじ赤い毛なみをしていた。馬の足もとでは、兄弟の行くところへなら、どこへでもついてくる、やせて神経質な、袋ねずみ狩りに使用する獵犬の一群が、しきりとけんかをしていて、すこし離れたところには、口輪をはめ、いかにも貴族然とした

た顔つきの黒ぶちの馬車犬が一匹、主人たちが晩の食事にかえるのを、辛抱よく待っていた。

これらの犬と馬と兄弟との間には、いつもいっしょにいるという以上の深いつながりがあった。いずれも、健康で、思慮のない若い動物たちで、育ちがよくて、優美で、癩癧<sup>かたがね</sup>がつよく、青年たちは彼らの乗馬と同じように、血気さかんで、かんしゃくもちで危険ではあるが、うまくあやつってくれる人にたいしては、すこぶるやさしい感情をもっていた。

安楽な大農園主の生活のなかに生まれ、幼時から、なに不自由なく育てられてきたのだが、このボーチにならんだ三つの顔には、けつして無気力な弱々しいものはなかった。一生を、ひろびろとした外気のなかですごし、読書などという退屈なことには、あまり頭をなやましたことのない、自然人の、はちきれするような鋭気と精悍さをもっていた。ジョージア州の北部にある、ここクレイトン郡の生活は、まだ新しく、すでに根のはえた、オーガスタやサヴァナやチャールストンなどにくらべると、ずっと野性的であった。だから、南部でも、もっとおちついた、古くから開けている地方の人々は、奥地のジョージア人たちをさげすんでいたが、北部ジョージアのこのあたりでは、昔ふうの典雅な教養が欠けていても、日常生活に必要なことさえうまく処理していければ、いっこう恥ではなかった。よい綿花をつくること、乗馬が巧みなこと、射撃がじょうずなこと、軽やかに踊ること、やさしく婦人に奉仕し、一人前に酒がのめて酒席の相手がつとまること、彼らに必要なのは、これだけだった。

ふたりとも、こんな方面の才能にかけては、なかなかすぐれていた。書物にふくまれている内容から何かを学びとる才能に欠けている点においても、同じように彼らには有名だった。彼らの家はこの郡内でも肩をならべるものはないほど財力があり、馬や奴隸も一ばん数多くもっていたが、このむすこたちは、こと学問に関しては、近所に住んでいる貧乏白人の大部分よりも、劣っていた。

スチュアートとブレントが、この四月の午後、タラ屋敷のボーチでのらくらしている理由も、まさしくここにあった。その日もちょうど彼らは、ジョージア大学から——この二年間に彼らを退学させた四番目の大学から、放校されてきたばかりなのである。彼らの兄のトムとボイドも、弟たちを歓迎しないような学校には、いてやらないというので、みないっしょに帰ってきてしまった。スチュアートもブレントも、こんどの放校処分を非常におもしろがっていた。またスカールレットも、去年フェイアットヴィル女学校を卒業して以来、これも自分からは一冊の書物もひもといたことがないほどだから、彼らと同様に、これをおもしろがっていた。

「あなたたちふたりやトムは、放校なんて、なんとも思っちゃいまいでしょうけど」と彼女は言った。「でも、ボイドはどうかしら。あの人は、きちんと学校をやりがっているんじゃないでしょう。それなのに、あなたたちふたりして、ヴァージニア大学、アラバマ大学、南カロライナ大学、そしてこんどはジョージア大学と、どこもみんなやめさせてしまつて、こんなふうだと、いつになつてもあの人、卒業できないことよ」

「なあに、あいつは、フェイアットヴィルのバーマリー判事さんの事務所で、法律の勉強をするからいいんだよ。こんなことは、たいして問題ではないんだ。それに、こんどのがなくなつたつて、どっちみちぼくたちは学期が終わらないうちに帰つてこなければならなかったんだからね」と、ブレントが、こともなげにいい放つた。

「あら、どうして？」

「戦争だよ、ばかだなあ！ いつ戦争がおっぱじまるかわからないんだよ。きみは、戦争がはじまるというのに、ぼくらが学校にじっとしていられると思うのかい」

「戦争なんてありはしないわよ」とスカールレットは、そんな話題はもううんざりといった調子で言った。「ただうわさだけよ。なぜって、先週、アシュレ・ウィルクスさん父子<sup>おやこ</sup>がきて、うちのお父さんに話し

てたわ、ワシントンに派遣された南部の委員たちが、南部諸州同盟の

ことについて、リンカーン氏と、友好——なんていったかしら、そう  
そう、友好協定よ、その友好協定ってものを、まとめたって。どっち  
にしてもヤンキー（北部人）は、戦争する気がないほど南部をこわが  
っているのよ。だから戦争なんてありはしないわ。あたし、もう戦争  
の話なんかあきあきしちゃった」

「戦争がないって？」双子は、自分たちがだまされたかのように、い  
きりたって叫んだ。

「もちろん戦争になるよ。そりゃヤンキーはわれわれを恐れているか  
もしれない。しかし、とにかく一昨日、ボールガール將軍が、サムタ  
ー要塞を攻撃して、やつらを追い払ってしまったんだ！こうなった  
以上は、やつらにしても、戦争せざるをえないさ。さもなくば彼ら  
は、世界じゅうに臆病者の名をさらすことになるもの。南部同盟は  
——」

と、スチュアートがいうと、スカーレットは、もうがまんができな  
いというように、口をとがらせた。

「もう一度戦争という言葉葉を口にしたら、あたし、家のなかにはいっ  
てドアをしめちゃうことよ。生まれてからこのかた『戦争』という言  
葉ほど、あたしをあきあきさせたものはないわ。それに、もう一つは  
『南北分離』という言葉葉——。うちのお父さんときたら、朝も昼も晩

も戦争の話、それからたずねてくる人が、またきまつてサムター要塞  
だの、州権の独立だの、リンカーンだのと、そんな話ばかり。まっ  
たくあたし悲鳴をあげたくなるわ。しかも、若い人たちが、やっ  
ぱりそれで、やれ戦争とか、これから編成される騎兵隊のこととか、  
そんな話ばかりなんでも。今年の春のパーティが、ちつともお  
もしろくなかったのは、男の人たちが、戦争のこと以外、話題がな  
かったからよ。このジョージア州が、去年のクリスマスがすむまで北部  
から分離するのを延期してくれたので、どんなにありがたかったか  
しれないわ。だってさもないと、せつかくのクリスマスパーティが、

めちゃくちゃになってしまったにちがいないんですもの。あんなた  
ち、もう一度戦争と言ったら、あたし、ほんとに家へはいっちゃうこ  
とよ」

彼女にとつては、それはそのとおりであった。彼女は、自分が中心  
になれない話題には、ながく辛抱することができなかった。だが、彼  
女は、そんなことをいうときにも、意識的にえくぼをふかめ、黒いま  
つ毛を蝶の羽のようにかるやかにまたきたき、ほほえんで見せるのを忘  
れなかった。だから青年たちは、彼女の予期したとおりに魅惑され、  
あわてて彼女を退屈させたことをあやまるのであった。戦争に興味を  
もてないからといって、彼らがスカーレットを思うことに変わり  
はなかった。かえって彼女への思いを深めた。戦争は男の仕事で、淑  
女のかかわり知るべきことではない。だから彼らは、彼女の態度を、  
かえって女らしさを示すものだと考えるのである。

退屈な戦争の話をやめさせた彼女は、こんどは、おもしろそうに、  
話題を当面のことにもどした。

「お母さまは、あんなたちふたりが、また放校になったのを、なんと  
おっしゃって？」

ふたりは、ぐあいのわるそうな顔をした。三か月前、ヴァージニア  
大学から論旨退学になって帰ってきたときの母親の態度を思いだした  
からである。

「それがね」とスチュアートが言った。「母はまだぼくたちに叱言を  
いう機会がないんだよ。トムとぼくたちふたりは、今朝、母がまだ起  
きないうちに家を出て、トムはフォントイン家へ行ってちこまっ  
ているし、ぼくたちはここへきちゃったから……」

「だって、昨夜あんたがたが帰ってきたとき、なにもおっしゃらな  
かったの？」

「ところが、昨夜は、とても運がよかったんだ。ぼくらのかえるちょ  
っと前に、母が先月ケンタッキーへ注文しといった種馬が、ちょうど運  
ばれてきてね、大騒ぎの最中さ。大きくて、——とてもすごい馬だ

ぜ、スカーレット。きみのお父さんにも、すぐ見にくるようというといひよ——。なにしろここへつれてくる途中、付き添いの馬丁を二頭みやらかすし、ジョーンズボロの駅まで引き取りに行ったうちの黒奴をふたりも踏んづけちまっただからね。おまけに、ぼくたちが帰るちょっと前には、厩舎を暴れまわって、母さんのもとの種馬のストロベリのやつを半殺しにしてしまっただ。ぼくらが帰ってみると、母さんは砂糖ぶくろをもつて厩舎の中にはいつて、その荒馬をなだめにかかっていたのだけれど、うちの母さんは、まったく馬のあやし方はうまいね。黒奴たちは、こわがって、たるきにぶらさがったまま、目ばかり光らせているのに、母さんが、まるで人間にでも話しかけるように話しかけると、馬のやつ、おとなしく母さんの手から砂糖をなめはじめたんだからね。馬にかけては、うちの母さんは、まったく第一人者だよ。やがて、母さんは、ぼくらの姿を見ると、『いったい、なんだって帰ってきたんだい、四人もそろって——。エジプトの疫病（やまび）よりも始末のわるい人たちだよ、ほんとに……』とやりはじめたんだ。すると、いひぐあいに、そのとき、馬のやつめ、急に鼻あらしを吹いて、あと足で立ち上がりかけたもんだから、『出て行っておくれ。この大きなかわいひの気が立っているのがわからないのかい。おまえたちのことは、万事明日の朝だ』ということになっちゃったんだ。だから、ぼくたちは、そのまま寝ちまって、今朝は、母さんにつかまらぬうちに逃げてきたってわけさ。あとのとりなし役にボイドをのこしてね』

「ボイドはお母さまに打たれはしないかしら」というのは、彼女もまた、郡内の人々と同じように、小柄なタールトン夫人が、成人したむすこたちをつかまえて容赦なく折檻（せうがん）するということについて、無関心ではありえなかったからである。打ったほうがよいと考えた場合には、彼女は鞭で背中を打つことさえあったのだ。

ビアトリス・タールトンは、まったくいそがしい婦人だった。大きな綿花畑と、百人の黒奴と、八人の子どもを管理するばかりでなく、

ジョージア州最大の種馬場まで経営していた。すぐ興奮する性質で、それに四人のむすこには、ずいぶん手をやいているので、馬や奴隷を打つことは、だれにも許さなかったが、むすこたちをときどき折檻することは、べつに害もあるまいと考えていた。

「むろん母さんだってボイドなら打ちはしないよ。あれは長男だし、それに兄弟じゅうで一ばんチビだから、母さんだって遠慮するんだ」と六フィート二インチの身長を誇るスチュアートが言った。「だから、ぼくたちは弁解係に彼を残してきたんだよ。だいたい母さんは、もうぼくたちを打つのはよすべきだね。ぼくたちだってもう十九なんだし、トムなんか二十一にもなっているのに、母さんたら、まるで五つか六つの子どもみたいに扱うんだからね」

「お母さんは、明日のウィルクス家のパーベキューには、その新しききた馬に乗っていらっしゃるの？」

「母さんは、乗って行きたいらしいんだけど、父さんが、まだあぶないからといってとめているんだ。それに姉妹たちも不賛成なんだ。せめて一度くらいは貴婦人らしく馬車に乗せて行きたいといっているんだよ」

「明日、降らないといいわね」とスカーレットは言った。「この一週間、毎日降っていたんですもの。パーベキューが家のなかのパーティになっちゃうほどつまらないものはないわ」

「なあに、明日は晴れるよ、そして六月みたいに暑くなるよ」とスチュアートが言った。「あの夕焼けを見てごらん。あんなに赤いの、ぼくは見たことがないよ。夕焼けでお天気がわかるんだよ」

彼らは、スカーレットの父ジェラルド・オハラが新しく開墾（かいはん）した、はてまなくつづく綿花耕地を越えたかたの、真紅にいろどられていた地平線をながめた。太陽は、いま真紅にたゆとう雲のなかを、フリント川の向こうの丘のかげに沈みつあった。四月の日の暖かさは、かすかな、おだやかな冷気のうちに消えていった。

その年は、あたたかいいきいきとした雨をともなあって、春が早くき

た。あかい桃の花は急に咲きだすし、やまぐみの花は、暗い沼地や遠い山々を、点々と白い星のようにいろどった。耕地の耕作はあらかたすんで、血のように赤い夕日が、新しくすきかえされたジョージアの赤土のあぜをいっそうあかく照らしていた。綿花の種子のまかれるのを待ちのぞんでいる湿潤な飢えきついている畑地の、あぜの一ばん上の砂の多いところは淡紅色に、また畦溝にそって影のおちている側面は、朱や深紅色やえび茶にそまっていた。白煉瓦の屋敷は、荒れくるう真紅の海にうかんではいる島のように見えた。その海は、旋回し、まがりくねり、あるいは彎月状をなして押しよせてくる波濤の淡紅色の波がしらがり、まさにくずれようとするたとんに化石したかのようであった。というのは、このあたりに、中部ジョージア地方のような黄色い粘土の平らな土地や、海岸地方の豊饒な黒土の農場に見られるような、一直線の長いあぜというものがなからだ。傾斜と起伏の多いここ北ジョージアの山麓地方では、豊饒な土壌が川底に流れこむのを防ぐために、曲がりくねったあぜを無数にすきおこしていたのである。

野蠻なほど土の赤い土地であった。雨あがりには血のようになり、ひでりには煉瓦の灰のようになつた。しかしそれは世界で最適の綿花栽培地であった。白い家、たがやされた平和な畑地、ゆるやかに流れる黄色くにぎった川など、気持ちのよい土地であったが、一方、明るい太陽の輝きと深い影との、対照のはげしい土地でもあった。きれいに開墾された農園、そして何マイルとなくつづいている綿花畑は、ゆったりと満足して、暖かい陽光にほえみかけていた。その野の果ては原始林につづいていた。そこは、まっ昼間でも暗く、冷たく、気味わるく、いくらか不吉でさえもあった。そして松風の音は、「気をつけろ！ 気をつけろ！ おまえはかつてはおれたちのものだった。またいつかは、もとのようにしてやるぞ」と静かなため息とともに大地をおびやかしながら、その時のくるのを何年も辛抱づよく待っているかと思われた。

ポーチにいる三人の耳に、ひづめの音や、馬具の鎖のがちがち

いう音や、黒奴の鋭いんきそうな笑い声などがきこえてきた。野良働きの連中や驪馬どもが農場から引きあげてきたのだ。家のなかからは、スカレットの母のエレン・オハラが、鍵入れのバスケットをもってきた黒奴の小さな娘を呼ぶ、やさしい声が流れてきた。やがて、かん高い子どもっぽい声が、「へえ、奥さま」と答え、つづいてエレンが裏の煉製所のほうへ歩いてゆく足音がきこえたのは、たぶん野良からもどった人たちに食事をわけあたえるためであろう。こちらの食堂からは、タラ屋敷の召使頭であるポークが、夕食の用事をしていらしく、皿や銀器のふれあう音がきこえてきた。

この最後の音で、双子は、もう帰る時刻だと気がついた。だが、母親と顔を合わせるのがいやだったので、いまにもスカレットが夕食にょんでくればせぬかと期待して、タラのポーチにぐずぐずしていた。「ねえ、スカレット、明日のことなんだけど」とブレントが言った。「ぼくらは、この土地から離れていたの、園遊会のこともある舞踏会のことでも知らずにいたのだが、だからといって、明晩踊って悪いという理由はないだろう。明晩のダンスの番組、まさか、まだ全部約束ずみではないだろうね、どう？」

「ううん、約束ずみよ。だって、あなたたちが帰ってくるなんてこと知らなかったんですもの。あなたたちを待っていて、そのおかげで壁の花になるなんて、いやですものね」

「きみが壁の花になる！」ふたりは騒々しく笑った。

「ねえ、きみ、ぼくには最初のワルツを、スチュアートには最後のワルツを、そして夕食はぼくたちといっしょにする約束してくれないか。またこの前の舞踏会のとこのように、階段に腰かけて、ジンシーばあさんと呼んで、運命占いをしてみようじゃないか」

「いや、あたし、ジンシーばあさんの占い、大きらいよ。あなたたちだって知ってるじゃないの、あたしのことを、髪の毛のまっ黒い、そして黒い長い口ひげの紳士と結婚するなんていうんですもの。髪の毛の黒い紳士なんて、あたし、大きらいだわ」

「じゃ、きみ、赤毛が好きなんだね。そうなんだろう」とブレントが、わが意を得たりという笑い顔をした。「さあ、ワルツと夕食の約束をしてくれよ」

「きみが約束してくれれば、ぼくたちだって、秘密のことを話してあげな」と、スチュアートが言った。

「どんなこと？」と、スカーレットは、子どものように、さっそくその言葉にとびついた。

「スチュアート、それ、昨日アトランタで聞いたあれかい？ あれなら、だれにも話さないって約束だったじゃないか」

「うん、ビティおばさんからきいたあの話さ」

「え、どなた？」

「ほら、アシュレ・ウィルクスの親類で、アトランタに住んでいるビティバット・ハミルトンさんさ、知ってるだろう——チャールズ・ハミルトンやメラニー・ハミルトンの叔母さんさ」

「知ってるわ、妙なおばあさん、あんな変ちくりんなおばあさん、あたし見たこともないわ」

「まったくね。ぼくたちが昨日アトランタで汽車を待っていると、ちょうどあの人が馬車で通りかかったのさ。そこで馬をとめて、ぼくらとちょっと話したんだが、そのとき、明晩のウィルクス家の舞踏会で婚約の発表があるはずだともらしてくれたんだよ」

「ああ、そのことなら知ってたよ」とスカーレットは、つまらなそうに言った。「あのひとの甥の、あの頭のすこし足りないチャールズ・ハミルトンとハネー・ウィルクスのことでしよう。チャールズのほうは、あんまり気がすんでいないらしいけど、あのふたりが、いつかは結婚するということは、何年も前からだれでも知っていることよ」

「ほんとうにきみはチャールズを低能だと思っているのかい」とブレントが言った。「だって、去年のクリスマススマスのころには、さかんにきみのまわりにへばりつかせていたじゃないか」

「へばりつくのは向こうの勝手よ」スカーレットはちよつと肩をすく

めてみせた。「まるで女みたいな男だと思うわ」

「ところが、こんど発表されるというのは、チャールズの婚約のことじゃないんだよ」とスチュアートは得意そうにいった。「アシュレとね、チャールズの妹のメラニーとの婚約のことなんだ」

スカーレットは、顔色は変わらなかったが、くちびるは白くなっていった。——ちょうど、警告もなしに致命的な一撃をくらった人が、その衝撃をうけた瞬間には、しばらく何事が起こったかわからないのと同じだった。スチュアートをみつめているスカーレットの顔が、あまり静かだったので、他人の心をよむことのできぬ彼は、当然、彼女はただ驚いて興味をひかれただけなんだと解釈した。

「ビティおばさんがいうには、メラニーの健康が思わしくないので、来年まで発表はしたくないのだが、戦争の話があまりやかましくなったので、いっそのこと早く結婚させたほうがいいだろうと両家のあいだで話がきまったのだそうだよ。それで明晩の食事のやすみのときに発表するのだそうさ。さあ、スカーレット、ぼくたちも秘密を話してあげたんだから、きみもぼくたちといっしょに食事をするよと約束したまえよ」

「もちろん、お約束するわ」とスカーレットは、機械的に言った。

「そして、ワルツを全部ね？」

「ええ、全部」

「すごいぞ！ きつと、ほかの連中が嫉いて気持ちがいたいになるぜ」

「気持ちがいたいにさせとけばいいさ」とブレントが言った。

「ぼくたち二人で始末してしまふよ。ね、スカーレット、朝の園遊会でも、ぼくたちといっしょの席についてくれないか」

「え、なあに？」

スチュアートが、もう一度同じことをくりかえした。

「もちろんよ」

兄弟は、よろこびの、だがいくらかは驚きの顔を見あわせた。ふた

りとも彼女が自分たちに好意をもっているとうぬばれてはいたが、いままでも、こんなにたやすくその好意のしるしを得たことはなかったのだ。いつもは、ごきげんとりと頼んでも、うんともいやともいわず、ふくれるとおもしろがって笑うし、おこるとつんと冷淡になるし、さんざん手こずらせるのが常だったのである。それなのに、いまは、――園遊会のときにはいっしょの席についてくれるというし、ワルツは全部（彼らは舞踏を全部ワルツにするつもりなのだ）彼らと踊ってくれるというし、食後の時間までいっしょにいてくれるというし、實際上、明日の全部を約束したようなものである。これでこそ大を放校されてきただけの、かゝったものである。

この成功に新しく熱情をかきたてられて、彼らはいつそう帰ろうとはせず、園遊会のこと、舞踏会のこと、アシュレ・ウィルクスのこと、メラニー・ハミルトンのことなどを話題に、たがいに相手をおさえてはしゃべり合い、アシュレたちをひやかしたり、笑ったり、夕食によんでくれるようにと、おおっぴらに、スカレットにほめかけたりした。だが、しばらくすると彼らは、スカレットが、ちっともものを言わなくなったのに気がついた。なんとなく、いつもと様子がちがっている。なぜだかふたりにはわからないのだが、ともかく午後のはがらかさが消えうせているのである。スカレットは、返事だけはちゃんとするのだが、彼らの話にはいっこう身を入れていない様子であった。なにか不可解なものを感じて、それに困惑したふたりは、しばらくがんばっていたが、やがて時計を見ながら、しぶしぶ立ちあがった。

太陽は、新しくたがやされた耕地のかたに沈みかけて、川向こうの高い森が影絵のように黒くぼんやりと見えた。前庭には、煙突をねぐらにするつばめが飛びかい、鶏やあひるや七面鳥が、あるいはよちよちと、あるいは気どって、あるいはいだらだと、外から帰ってきた。スチュアートがどなった。「ジームズ？」すると、まもなく、彼らと同じ年ごろの背の高い黒奴が、息せききって家の向こうからあらわ

れ、馬のつないであるところへ走って行った。ジームズというのは、獵犬と同じように、どこへでも付き添ってくる彼らに専属の黒奴だった。彼はおさないときから兄弟の遊び仲間で、双子の十歳の誕生日のとき、専属の奴隷として、彼らに与えられたのである。ジームズの姿を見ると、獵犬どもは赤い砂ぼこりのなから起きあがって、主人たちを待ちうけた。ふたりは、スカレットにあいさつして握手をしながら、明朝は早くからウィルクス家で待っていると云った。そして歩道にとびおりに馬にまたがり、ジームズを従えて、彼女に帽子をふったり、大きな声であいさつの言葉を送ったりしながら、杉の並木道をかけおいて行った。

ほこりっぽい道を曲がってタラ屋敷から見えなくなると、ブレントは、みずきの木陰に馬をとめた。スチュアートも、これにならった。黒奴は彼らの数歩うしろで、これも馬をとめた。馬は、手綱がゆるんだので、首をのびして、やわらかい春の若草を食みはじめ、辛抱づよい獵犬の群れは、またやわらかい赤土の上にうずくまって、せまりくる夕やみのなかに飛びかうつばめを、ものほしうに見あげていた。ブレントの大きな無邪気な顔は当惑して、いささか腹だたしうに見えた。

「なあ、きみには彼女が夕食にさそってくれそうな様子に見えなかったかい」

「ぼくもそうするだろうと思ったよ」とスチュアートも言った。「ぼくはそれを待っていたんだ。だが、さそってくれなかった。どうしてだろう？」

「わからない。だが、いかにも招待してくれそうに、ぼくには思えたよ。とにかく今日は、ぼくらが帰ってきた最初の日なんだし、彼女だつてずいぶん長い間、ぼくらに会わなかったんだ。ぼくたち、まだ彼女に話したいことがたくさんあったんだからね」

「ぼくらがはじめて顔を見せたときには、彼女は、とてもよろこんでいたようじゃないか」

「そうだよ、ぼくもそう思う」

「それなのに、三十分ばかり前から、急に頭痛でもするように黙ってしまった」

「ぼくも気づいてはいたが、そのときにはなんとも思わなかった。いったい、どうしたんだらう？」

「わからないね。何か気にさわるようなことでも、ぼくたち言ったのかしら？」

ふたりは、ちょっと考えた。

「どうも思いあたらないな。それにスカーレットがきげんをそこねたときは、すぐだれにでもわかるよ。他の女の子とちがって、感情をかくさないからね」

「そうだ。そこがぼくは好きなのさ。きげんをそこねても、ほかの女の子のように、いやみを言ったり、いやに冷淡になったりしないで、すぐそのことをいうからね。だが、彼女が病気にでもなったように黙ってしまったのは、きつとぼくが何か言ったか、したかしたせいだよ。だって、ぼくらが行ったときには、あんなによろこんでいて、夕食に招待しようと思っていたにちがいないんだもの」

「まさかぼくらが放校されたからじゃないだろうね」

「冗談じゃないよ。ぼくらがそのことを話したら、彼女はよろこんで笑っていたじゃないか。それに、スカーレットだって、ぼくたち以上にはけつて学問好きじゃないからね」

ブレントは、鞍の上からふり返り、黒奴の馬丁を呼んだ。

「ジームズ！」

「へえ」

「おまえ、ぼくたちがスカーレットさんに話していたこと、聞いただらう？」

「いいえ、ブレントさま、おまえさまは、おいらが白人の人たちの話を盗みぎきするとも思つたらっしゃるのかね」

「盗みぎきしない？ だつておまえたち黒奴は、ぼくたちのすること

をなんでも知ってるじゃないか。このうそつきめ！ ぼくは、ちゃんとこの目で見てたんだぞ。おまえはボーチのすみのところにそつとしたのんできて、壁ぎわのジャスマインのかげにしゃがんでいたじゃないか。だからきいてるんだ。ぼくたちが何かスカーレットさんをおこらせような——きげんをそこなうようなことを言ったと思うか？」

こういわれては、ジームズも、これ以上盗みぎきはしないと弁解することをあきらめ、黒い額にしわをよせて答えた。

「いいえ、おまえさまがたは、あのかたをおこらせるようなことは申しませんでしたよ。あのかたが会いたがついていなさるところへ、おまえさまがたがおいでになったもんだで、たいそうよろこんでいなすつた。そして小鳥のようにさえずつていなすつた。それが、アシュレさまとメラニー・ハミルトンさまが結婚なさるちゅうことをおまえさまがたが話すと、急に鷹が上をとんでいるときの小鳥のように、黙っておしまいなすつただよ」

兄弟は顔を見合わせてうなずきあつた。だが、どうも理解できなかった。

「ジームズのいうのは、ほんとだよ。だが、なぜだかぼくにはわからない」とスチュアートが言った。

「だって、アシュレは彼女にとって友だちというだけで、なんでもないじゃないか。彼女が彼に好意をよせているはずはない。彼女が好意をもっているのはぼくたちなんだから」

ブレントもそれに賛成してうなずいた。

「だが、こうは考えられないかい。アシュレが、婚約を明晩発表するということと彼女に話さないものだから、ほかの人たちに話す前に、なぜ親しい友だちの自分に話してくれないのかというので、きげんをそこねたというふうには。女の子なんでものは、そんなことを一番最初に知るといふことを、とても重大に考えているもんだからね」

「そうかもしれないね。だが、明日つてことを彼女に話さないからって、それをおこるのは変だな。発表するまでは秘密にしておいて、み

んなを驚かそうというつもりなんだもの。それに男は自分の婚約を伏せておく権利<sup>権利</sup>くらいは、もっているはずじゃないかね。ぼくらだって、メラニーの叔母さんが話してくれなきゃ、知らなかったんだからね。スカレットだって、アシュレがメラニーといつかは結婚するということくらい、知ってなければならぬはずだと思うよ。ぼくらだって、何年も前から知ってたじゃないか。ウィルクス家とハミルトン家は、昔から、いとこどうし縁組みし合っている間柄なんだ。だからハネー・ウィルクスがメラニーの兄のチャールズと結婚することと同様、アシュレたちのこともだれだって知っているはずだよ」

「もう、考えるのはよそうや。しかし、スカレットが夕食にさそってくれなかったのは、残念だったな。ぼくは帰って、母さんに放校のことを叱られるのがいやなんだよ。こんどがはじめてじゃあるまいしね」「たぶんボイドが、今ごろはもう母さんをなだめてるよ。あいつはチビのくせに弁舌家だからね。いつもうまいぐあいになだめてしまうじゃないか」

「だけど、あいつのは時間がかかるんでね。なんだかんだとまわりくどくしゃべり立てて、母さんがうんざりして、どうでもよくなつてしまいい、もういいから、そんな理屈は弁護士になったときの用意にとっておけと言わせちゃうのが、あいつの手なんだからね。しかし、まだそれだけの時間はなかっただろうと思うよ。きっと母さんは、まだ新しい馬のことにのぼせ上がって、今晚夕食のときボイドの姿を見るまでは、ぼくらが帰ってきたことなんか忘れてしまっているだろうからね。ところが、ご飯を食べてるうちに、母さんはかんかんになって怒るよ。それから、大学総長がきみやばくにあんことを言った以上、そんな学校に残っていることは、われわれすべてにとって名譽にかかわるとやり出すのは、まず十時すぎるね。してみると、母さんのぼくたちにたいする怒りを、ボイドがうまいぐあいに大学総長のほうに向きを変えさせ、そんな総長ならなせ射ち殺してこなかったのかとボイドをどなりつけるのは、どうしても夜なかだよ。これは夜なかまでは

帰れないぜ」

ふたりは憂うつそうに顔を見合わせた。彼らにとっては、荒馬も、弾丸の射ち合いをするけんかも、近所の人たちをおこらせることも、いっとうこわくはなかったが、この赤毛の母のごことと、ゆうよもなく飛んでくる鞭<sup>むち</sup>だけには、非常に恐れをなしていた。

「よし、ではね」とプレントは言った。「ウィルクス家へ行こう。アシュレや妹たちが、きっと歓迎してくれるぜ」

スチュアートは、ちよつとつらそうな顔をした。

「あそこはだめだよ。明日の園遊会の準備で、みんないそがしいだろうし、それに――」

「そうそう、忘れていた」プレントは、あわてて取り消した。「あそこはよそう」

彼らは、しばらく黙って馬を走らせていたが、スチュアートの日にやけた顔には、当惑の色がうかんでいた。去年の夏まで、スチュアートはウィルクス家の娘インディアに求婚していた。両家の家族たちはもちろん、この郡全体が、この結婚には大賛成だった。おちついた我慢づよいインディア・ウィルクスの人柄が、彼におちつきをあたえるだろうと、郡の人たちは感じたからである。ともかく人々は、それを熱心に希望した。そうして、プレントさえ不満でなかったら、スチュアートは、おそらく結婚してしまつたかもしれない。プレントも彼女がきらいではなかったが、器量もわるいし、平凡な女だと思っていた。いつまでも組みになつて行きたいスチュアートの妻には、自分までがほれこむような相手がほしかったのだ。これは、この双子兄弟にとつて、はじめての意見の相違だった。プレントは、自分の兄弟が、自分のちつとも興味のない女に心をひかれてるのが腹立たしかった。

すると、去年の夏、ジョーンズボロの檉<sup>からし</sup>林のなかで開かれた政見演説会<sup>政見演説会</sup>のときから、ふたりとも、ずっと以前から彼女を知っていた。子ども<sup>子ども</sup>の時分には、彼女は、彼らと同じくらいくみに馬にも乗つたし木